

ソヴェト権力の二カ年の最も重要な二つの教訓

ソヴェト権力の二カ年

十月革命二周年記念のための全ロシア中央執行委員会、
モスクワ労働者・農民代表ソヴェト、全ロシア労働組合
中央評議会、工場委員会の合同会議での演説

同志諸君！ まだ帝国主義戦争がたけなわであった二年前に、ロシアのプロレタリアートが蜂起をおこし、国家権力を獲得したことは、ロシア国内のブルジョアジーの味方のだれにも、さらに他の国々の人民大衆や、おそらくは、その労働者の大多数にも、勇敢だが、成功する見込みのない企てとおもわれた。その当時には、世界帝国主義は巨大な、不敗の勢力であるから、それに反抗して立とうと企てたおくれた国の労働者は、無分別者だとおもわれた。だが、いま、過ぎさった二カ年を振りかえると、われわれの敵さえ、われわれが正しかったことをますます認めはじめていることがわかる。とうてい打ち勝つことのできない巨人とおもわれた帝国主義がその実粘土の足をした巨人であったことが、だれの目にも明らかになっていることがわかる。そして、われわれがたたかいながら経てきた二カ年は、ロシアのプロレタリアートばかりでなく、国際プロレタリアートにとっても、勝利をあらわすものであったことが、ますます明瞭になっている。……

いまや、われわれは二年にわたる英雄的な建設から一般的な教訓を引きだすよう試みるべきであると、私にはおもわれる。

私の考えでは二年にわたるソヴェト共和国の建設から引きだされるもっとも重要な結論、私の見るところではわれわれにとってなによりも重要な結論は、労働者権力の建設の教訓である。この点では、われわれは、諸君の大部分が自分の経験から知っているような、あれこれの人民委員部の活動に関係する個々の具体的事実だけにかぎってはならないと、私はおもう。いまやわれわれは、過ぎさったことを振りかえってみて、この建設から一般的な教訓を引きだすべきであると、私はおもう。われわれは、その教訓を摂取して、それをいっそう広く勤労大衆のなかに持ちこむであろう。労働者が全般的な国家統治に参加したので、それではじめてわれわれは、このような信じられないほどの困難のもとでも持ちこたえることができたのだということ、そしてこの道をすすむことによってはじめて、われわれは完全な勝利をかちとることができるであろうということ、これがその教訓である。われわれが引きださなければならないもう一つの教訓は、農民にたいする、幾千万の農民の広大な大衆にたいする正しい態度ということである。なぜなら、こういう態度をとったからこそ、われわれはあらゆる困難にもかかわらずに生きぬくことができたのであり、またこういう態度がしめす道をすすむのみ、われわれは成功につぐ（に…ママ）成功をおさめることができるからである。

もし諸君が過ぎさったことを思いおこすなら、すなわち、ソヴェト権力が最初にとった措置を思いおこし、軍事をもふくめて、あらゆる行政部門にわたる共和国の建設全体を思いおこすなら、二年前の十月には、労働者階級の権力ははじまったばかりで、国家権力機関は実際にはわれわれの手になかったということが、わかるであろう。そして、過ぎさつ

た二年間を振りかえれば、われわれはあらゆる部門で——軍事でも、政治でも、経済でも——、真の国家権力機関をつくりだすため、一つ一つの陣地を一步一步たたかいて、われわれよりまえにすでに労働者大衆や勤労大衆を先導していた人々を途上から一掃しなければならなかったと言う私の意見に、諸君は同意されるであろう。

われわれにとってとくに重要なことは、この期間におこった発展を理解することである。なぜなら、この発展は世界のすべての国で同じ道をすすんでいるからである。労働者大衆と勤労大衆がはじめにとる数歩は、彼らのほんとうの指導者といっしょになされるのではない。だが、いまや、プロレタリアートは、みずから国家の統治、政治権力をその手ににぎろうとしており、どこでも、古い小ブルジョア民主主義派の先入見——わが国ではメンシェヴィキとエス・エルによって、ヨーロッパ全体ではブルジョア諸政府の代表者によって表現されている古い先入見を破壊しつつある指導者が、プロレタリアートの先頭にいるのが見られる。これは、以前には例外であったが、いまでは通則となっている。

注) ………は青山の略

第三〇卷『ソヴェト権力の二カ年』P116～117

1919年11月7日

ポイント

この建設から引きだすべき一般的な教訓。

①労働者が全般的な国家統治に参加したので、それではじめてわれわれは、このような信じられないほどの困難のもとでも持ちこたえることができたのだということ、そしてこの道をすすむことによってはじめて、われわれは完全な勝利をかちとることができるであろうということ。

②農民にたいする、幾千万の農民の広大な大衆にたいする正しい態度をとったということ。こういう態度をとったからこそ、われわれはあらゆる困難にもかかわりつぱに生きぬくことができたのであり、またこういう態度がしめす道をすすんでのみ、われわれは成功につぐ成功をおさめることができる、ということ。

注) 軍隊の10分の9までが農民からなっている。(P177参照)

われわれにとってとくに重要なことは、この期間におこった発展を理解することである。労働者大衆と勤労大衆がはじめにとる数歩は、彼らのほんとうの指導者といっしょになされるのではない。いまや、古い先入見を破壊しつつある指導者が、プロレタリアートの先頭にいるのが見られる。

全ロシア中央執行委員会の構成について

全ロシア中央執行委員会の構成に
ついてのロシア共産党（ボ）中央
委員会総会の決定草案によせて*

- (一) すべての人民委員（人民委員会議議長をふくむ）と人民委員代理をふくめない。
- (二) 残りのものうちからは、「インテリゲンツィア」と中央機関のソヴェト勤務員との数を減らす。
- (三) 党外の労働者・農民大衆と無条件に緊密に結びついている、労働者および勤労農民の数を大量にふやす。
- (六) 党大会の決定**に正確に合致させる。

* この文書は、第七回全ロシア・ソヴェト大会で選出するはずの全ロシア中央執行委員会の構成員の問題について、1919年11月29日に党中央委員会総会の採択した決定の基礎になった。

**ロシア共産党（ボ）第八回大会の組織問題についての決定をさす。ソヴェト建設についての章には、全ロシア中央執行委員会の構成を変えるべきであり、執行委員は、主として、地方で労働者・農民のあいだで常時活動している活動家でなければならないと述べてある。

第42巻『全ロシア中央執行委員会の構成についての決定草案』P181～182
1919年11月29日に執筆 手稿によって印刷

コメント

レーニンの民主的な姿勢、労働者・勤労農民に基礎をおく姿勢が現れている。

『憲法制定会議の選挙とプロレタリアートの独裁』

ロシア革命の過程を描いた非常に優れた論文。ただし、この中でレーニンは、動搖的な小ブルジョアジーは、最も重大な政治的な問題を投票によって解決することはできず、プロレタリアートが権力を取り、国家権力という武器を利用してその共感と支持を最終的に獲得することができた、としている。これは、ロシアの経験であるということを留意すべきだ。

第三〇巻 P251～276 1919.12.16